

隊友 船橋だより

平成27年2月号

発行：千葉県隊友会 船橋支部事務局

会員の投稿

国旗の思い出（築山正）

昭和24年、今を去る65年前の国旗についての思い出である。当時、私は貨物船の乗組員であった。メキシコ西岸のカリフォルニア湾の中間に存在する岩石と砂山の島、カルメン島での出来事である。その島の湖に潮が入り自然に乾燥して岩塩になったものを日本へ運搬するために寄港した時のことである。

積み荷の荷役中の休憩時間に荷役に従事する港湾労働者から楽器を借りたいとの申し出があり、乗組員が所持するギター、バイオリン、マンドリンをかき集めて貸与した。永年の荷役労働により節くれ立った指で四人が楽器の調弦をはじめ音程を確認し終わった後、その中の一人が船のメインマストを指差した。船舶は外国の港に入港した際はその国に敬意を表しメインマストにその国の国旗を掲揚することになっている。国旗を指さし跪いて演奏が始まった。その敬虔な姿を見たとき、その曲がメキシコの国歌であることが容易に理解できた。

昭和26年は終戦からまだ6年、日本の主要な都市は焼夷弾の爆撃により壊滅的な焼け野が原でとても国旗どころではなかった時代であった。メキシコ国歌の演奏が終わり次は中南米独特のタンゴか俗謡を期待していたが、何と、かの顕著なクラシックワルツの「波濤を超えて」であったのには驚いた。

人口も少なく岩石と砂山の環境でそれらしい教養があるとは思えない彼らの立ち居振る舞い、国旗と音楽に対する敬虔な態度には恐れ入った。

広大な太平洋の航海中に船が交叉することは極めて稀であるがそれが日本船の場合は奇跡的なことである。行き違いながら日の丸を掲げ、旗流信号で相互の航海の安全を交わしつつ別れたあの時の日の丸の感動は忘れられない。

現在、自分は日本文化の一つである剣道に身を置いており、年間数回の大会に参加している。その際、国旗を正面に掲揚し国歌を斉唱する。その都度、日本人としての自覚を呼び覚まされ日本人としての誇りを感じている。

昨今、国旗を揚げないため処罰云々で騒がれる等、論外のことではないだろうか。

原爆の投下を受けた唯一の日本こそ本気で平和を世界に訴え、世界に類のない伝統文化を持つ我々は世界に日の丸を知らしめ世界平和に貢献するべきではないかと思う昨今である。

事務局より：会員皆様の身近な出来事、体験、趣味のこと等、投稿をお待ちしています。

中国を学ぼう

26年12月の続き

10、中国と日本はお互い永遠に理解し得ない？

中国人は自分たちが優秀な民族だから、中国は世界の中心で一つの国というより、一つの文明と考える。乱世興亡の四千年という長い歴史の中で、中国人の世界観は一朝一夕に代わるとは思えない。

中国と日本は「一衣帯水」(帯のように細い水によって隔てられて接近する)の関係で(中国と日本は、東シナ海という海を挟んで非常に近い関係を持っている)中国人はこの言葉に別の意味で理解している。

即ち、中国は「衣」で日本は「帯」と。主体はあくまでも衣であり、帯はそれを補完するものだと考える。

また、中国人は小国日本は遠い昔から文明の進んだ中国に、遣隋使・遣唐使を送って朝貢を行ってきた。

中国文化を吸収することで現在の日本文化の基礎を築き上げたのだと、彼らは優越感を持っている。

11、中国人と日本人 違いはどこにあるのか

中 国	日 本
1、物の考え方(見かた)靖国神社論争の根底にある生死観の違い	
<p>墓をあばいてでも報復 死霊の復活を信じ、軍国主義復活だと。靖国神社に眠る軍国主義者であるA級戦犯たちの霊が召喚され、よみがえったらどうなるかと考える執念深さ。という事は靖国神社は日本のアキレス腱となる。だからここを叩く。中国人は五代にわたって復讐を遂げ、弱点を握りそこを徹底的に叩く。 孫子の兵法「擁強抑弱」(強いものを擁護し弱いものを抑える)で日中貿易は擁護するが、外交は中国が日本の弱点を握ってこれを抑える。</p>	<p>死んだらみな善人・仏様 日本は日中戦争で中国を侵略し、そして最後はアメリカが投下した原爆で敗北した。 日本は東京裁判で欧米諸国に裁かれ、そしてA級戦犯たちは処刑された。そのA級戦犯たちを祀っているのが靖国神社だ。 日本の過去の総理大臣たち、例えば、中曽根康弘・橋本龍太郎元総理大臣らは弱点だと知っていたから批判されるや、すぐに靖国参拝を自粛した。</p>
2、皇帝と天皇	
<p>「天の子」として宗教的神聖性を持ちながら絶対君主として独裁的政治権力を極め、数十万人の官僚たちを手足のように使い数百万人・数千万人の民を己一人の支配下に置くことができた。 しかし、この中国の皇帝は最初から滅びる運命であった。秦であれ、漢であれ、唐であれ、清であれ中国史上いかなる皇帝も、この悲惨な運命には逃れられなかった。 皇帝は必ず潰れ、皇帝の家系も必ず滅びる。これが中国の第一法則である。 歴史上の皇帝は独裁権力の頂点に立ち、権力の腐敗が進み、その限界に達した時、社会的変革、即ち世直しの断行が始まる、「改革」である。ここで皇帝たちは改革を恐れて、さらに権力の強化に走ってしまう。</p>	<p>日本の皇室は権力の争いや政権の交代などの世俗の有無変転と無関係に、自らの永続性を保つことが出来た。つまり、権力に自らの存立の根拠を置いていなかった。 例えば、江戸時代には、京都のひっそりとした一角のみすぼらしい御所に住み、権力構造から完全に疎外されながら祭祀や和歌の世界に生きた。 結果、日本の皇室は今でも健在である。 幕末～明治への歴史:時の権力が民族の直面する難題や危機にうまく対応できない時は、皇室を担ぎ出し、皇室を中心とする救国体制をあっという間に作り出した。日本の歴史には深い英知がある。 日本の天皇・皇室だけは、今でも伝統の基づく最高の地位と最高の品位を保ち、日本国の守護神として悠然と鎮座されている。</p>